

聖書:ルカの福音書23章39~56節

説教:わたしとともにパラダイスにいます

はじめに

来週のイースターを前に、今日から主の十字架の苦しみを覚える受難週が始まります。イエスは、誕生のときから十字架におつきになることだけを目指し、もしも十字架をはばもうとするものがあれば、どんな小さな事でも取りのけ、十字架が確実になるようにとまるで車のアクセルを踏むようなご生涯を歩みます。今日読んでいただいたところは、まさにその目標が達せられていく十字架で遂げられた最期の場面となります。そこで何が起きていたのか。きょうはイエスが「あなたは今日、私とともにパラダイスにいます」ということばに目を留めて考えてまいります。

## 1 十字架の上で

### 1) キリストなら自分と俺たちを救え

エルサレムの町の外にある「どくろ」と呼ばれる丘には三本の十字架が立てられ、イエスを真ん中にして左右には二人の犯罪人がつるされる。二人はおそらく強盗かなにかをして人を殺したのだろうと思われまふ。

その二人のうちの一人が十字架の上でイエスをののしりながらこう言います。39節。「おまえはキリストではないか。自分とおれたちを救え。」

十字架の周りに立っていた議員たちも、35節であざ笑いながらこう言っています。「あれは他人を救った。もし神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ったらよい。」

イエスをののしった犯罪人も、イエスをあざ笑っていた議員たちも、それぞれ置かれているところは十字架の上と下で正反対ですが、言っている事は同じです。「もしキリストならば、自分とおれたちを救えるはずだ。」

### 2) 私を思い出してください

これを聞いていたもう一人の犯罪人が40, 41節こう言います。「おまえは神を恐れぬのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。おれたちは、自分のしたことの報いを受けているのだから当たり前だ。だがこの方は、悪いことを何もしていない。」

この人は、自分がしてきたことを振り返って、十字架刑に処せられるのは当然である、それほどひどい

ことをしてきたという自覚をしています。それだけではありません。「おまえは神を恐れぬのか。」「だがこの方は、悪いことは何もしていない」とも言うのです。

かつて殺すか殺されるかというような極道の世界を渡り歩いてきた人です。危険の中で生き延びるために、人を見抜く洞察力は持っています。そんな人がイエスを見て、「この方には罪は何もない、この方は本当に神なのかかもしれない」と直感的にわかったようなのです。そして続けてこう語ります。42節。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」

周りでは「キリストなら俺たちを救え」と脅かすように叫んでいるのに、この人は「私を救ってください」とは言わずに、「思い出してください」とだけ言う。なぜかはわかりますよね。自分のしてきたことあまりにもひどくて、救われる資格は自分にはないと自覚しているから。そんな人が最期のギリギリのところで言えたのが、「私を思い出してください」ということばだったのでした。

## 2 イエス

### 1) 「パラダイスにいます」

イエスが答えられます。43節。「まことに、あなたに言います。あなたは今日、わたしとともにパラダイスにいます。」パラダイスとは、「エデンの園」の「園」という意味で使われることばで、神の国と言い換えることもでき、「あなたは救われているのだ」とイエスは言っているのです。

それはよいとして、でも、どうして十字架がパラダイスなのか。苦し紛れに悪い冗談でも言ったのか。もちろんそんなはずはない。日本語訳では誤解されやすいので、説明が必要です。「パラダイスにいます」と言われると、「いますでに、いる」とってしまふわけです。ちがいます。正確に訳せば「このあと、あなたはパラダイスにはいることになります。」十字架がパラダイスであると言っているわけではありません。

そこは理解できたとしても、新たな問題が出て来ます。これから死んでいくというのに、なぜパラダイスの話しができるのか。死で終わりならば、そんな話は絶対にできません。イエスは死の先にあるものをご覧になっています。

### 2) 霊をゆだねます

午後三時を過ぎて、太陽は光を失って辺りは暗くなったとき、イエスは「父よ、わたしの霊をあなたの御手にゆだねます」と叫んで息を引き取られました。最期のことばですから大切な意味があるはずです。きょうは二つ挙げます。

一つ目はイエスの側から言えることですが、この方は神の子キリストで、父なる神とともにこの世界を造られた方でもあり、自分を救おうと思えば救うことができました。ところがこの方は自分を救おうとせず、ご自分が死んだ後、どうなるのかはすべてを父なる神の御心にまかせると語ります。信仰とは何か。イエス・キリストがこのようにして示します。

二つ目のことは、人が死んだらどうなるのかです。死んだら肉体はなくなりますが、霊というものはそのまま存在して、父なる神の御手に戻っていく。そのことをはっきりと教えています。イエスは、その戻る場所のことをパラダイスとも言っているのです。では、そのパラダイスにどんな人たちが迎えられていたのか。次に、十字架の周りにいた人たちに目を向けながら考えます。

### 3 キリストはどこにおられたのか

#### 1) 百人隊長と群衆

47節。「百人隊長はこの出来事を見て、神をほめたたえ、『本当にこの方は正しい人であった』と言った。』」

百人隊長は、処刑がとどこおりに進むことしか関心がなかったはず。ところが彼は、十字架の上でイエスの死を間近に見て、神をほめたたえながら「本当にこの方は正しい人であった」と告白します。どうもなにか強い印象を受けたらしいのです。

群衆たちもそうです。この人たちは、不思議な奇蹟を見られるかもしれないと思って野次馬のように集まって来た。ところが処刑が終わったときどうなったか。48節。「これらの出来事を見て、悲しみのあまり胸をたたきながら帰って行った。」群衆の心にも十字架のできごとがただならぬ大きな印象をもたらし、なにか心を刺される思いがして悲しみながら家に帰るのです。

#### 2) ヨセフと女たち

そんな群衆たちから少し離れたところに立っていたのが、イエスの知人たち、ガリラヤからイエスについて来た女たち、そして議員の一人であったヨセフと呼ばれる人でした。ヨセフはイエスの身体の下げ渡しを願って、なきがらを自分が所有す

る新しい墓に納めます。自分はイエスの仲間であることを公にするようなものですから、議員としての資格、地位や名誉を失うかもしれません。それでもヨセフは恐れない。そこまでするのはどうしてなのでしょう。

#### 3) あなたが御国に入られるときには

あるとき十字架の上で一人の犯罪人が語ったことばをもう一度振り返ります。42節。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」私を思い出してくださいと語ったことについては先に触れました。今考えたいのは、その直前に語ったことばです。「あなたが御国に入られるときには。」

この犯罪人は、それまでイエスのことなど信じるなど考えたこともなかったでしょう。しかしイエスが罪がないのに苦しみを味わわれ、そのことに不平も言わず、むしろ自分を苦しめる者のために誠実に祈る姿を見たとき、衝撃を受けます。なぜそうできるのだろうか、考えたと思います。

そうすると理由は一つしかありません。死んだら終わりではない。神の国に入られる。この方はそれを信じて疑わない。

それに引き換え自分は何をしてきたのか。今まで人を殺してもなんとも思わず、自分のいのちを粗末にして、死んだら終わりだと言いつつきました。でもそれは間違っていた。死の先に神の国がある。この方は正しいかたなのだから、必ず神の国に入るだろう。でも自分は大変な罪を犯してきたのだから、そんなところに入る資格はない。それでこう言った。「イエス様。あなたが御国に入られるときには、私を思い出してください。」

それに対してのイエスの答えが、「あなたは今日、私とともにパラダイスにいます。」あなたは十字架につるされたけれど、遅すぎることはない。あなたも永遠のいのちを持って救われるのだと約束してくださった。

#### 4) 神は不公平なのか

自分の欲を満たすために人殺しをした極悪人でも、信仰告白すれば救われる。さんざん人を苦しめておきながら、最期の死ぬときになって、ひとこと悔い改めたら救われる。こんな話を聞いたら、多くの人は神は不公平だと言うかもしれません。

しかし、まず自分のことを振り返ってみたらどうでしょうか。確かに人は殺してこなかったかもしれないけれど、鋭いナイフのようなことばで人を傷つけ、嘘を言って人をだまし、隠し事をして愛する

人を欺いてきた。そういうことはなかったのか。そう考えたら、自分もこの犯罪者とどこが違うのか。同じではないか。それでも神は不公平だと言えるのか。むしろこう言うべきではないのか。「こんな私でも救ってくださった神はなんて不公平だろう。」

#### 5) 罪人の隣人となる

最後に考えます。変な言い方をしますが、イエスは十字架で苦しんでいたとき、どこにおられたのでしょうか。いま見たとおり、自分の罪を悔いて悲しむ犯罪人の隣にいました。ローマ軍の百人隊長のそばにいました。人々の目を恐れて自分の信仰を告白できずにいたアリマタヤのヨセフのそばにいました。ガリラヤからずっとイエスの後に従ってきた女性たちのそばにいました。そばにいて何をしたのでしょうか。十字架に縛られて何もできなかったのか。いいえ。たとえ死の間際にあっても人は救われる。神の国に入ることができることをお示しになりました。

それだけでしょうか。イエスは、十字架の周りに集まった群衆ひとり一人のそばにいます。イエスをあざ笑っていた議員たちのそばにも、そしてイエスの衣をだれが取るのかとくじを引いて大騒ぎしていた兵士たちのそばにもいた。野次馬として来た人たちにも、あざ笑うために来た人たちにも、あるいはまったく関心がない人にさえも、イエスはあらゆる人たちをパラダイスに招くために隣人としておられました。

私たちはこの方を十字架につけました。しかし神は私たちを責めようとせず、かえって「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです」といのちをかけてとりなしの祈りをしてくださいました。主の御名をあがめつつ、受難週を過ごしてまいります。